

第53回日本泌尿器科学会中部総会 ワークショップ

「—Bed to bench to bed—泌尿器癌集学的治療の新展開」

—司会の言葉—

守殿 貞夫¹, 三木 恒治²¹神戸大学, ²京都府立医科大学

泌尿器科領域癌に対する最近の診断・治療の進歩は目ざましいものがある。しかし、インターフェロンやインターロイキン-2 不応性の転移性腎癌、内分泌療法抵抗性前立腺癌、化学療法耐性精巣腫瘍や膀胱癌に対する治療などまだ課題が多いのが現状である。そこで本セッションでは、難治性泌尿器科領域癌に対する新しい治療戦略について以下の4人の先生に貴重な研究内容を発表していただいた。

奈良県立医科大学の植村天受先生には、「腎細胞癌に対する MN/CA9 を分子標的とした特異的免疫療法—HLA-A24 拘束性ペプチドワクチンを用いた第Ⅰ相臨床試験—」と題し、インターフェロンなどの免疫療法に不応性の転移性腎癌に対する HLA-A24 拘束性 MN/CA9 抗原ペプチドを用いた癌ワクチン療法に関して、その有望な第Ⅰ相臨床試験データを報告していただいた。

神戸大学の後藤章暢先生には、「ホルモン抵抗性前立腺癌転移巣に対する治療法について」と題し、再燃前立腺癌の中で骨転移を標的とした臓器特異性オステ

オカルシンプロモーターを用いた自殺遺伝子治療の興味深い臨床データを発表していただいた。

京都府立医科大学の水谷陽一先生には「腎癌に対する Interferon- β /Liposome 製剤を用いた遺伝子治療の開発」と題し、腎癌に対する Interferon- β 遺伝子治療の in vitro, in vivo を含めた基礎研究を発表していただいた。現在、この研究は遺伝子治療臨床研究審査委員会に申請中であり、近い将来の臨床応用が期待される。

金沢大学の溝上敦先生には、「泌尿器科系癌に対する分子標的治療」と題し、腎癌、膀胱癌、前立腺癌に対する選択的 HER2 チロシンキナーゼ阻害剤 (TAK-165) を用いた分子標的治療に関する基礎データを報告していただいた。この TAK-165 は用いた泌尿器科癌に対して著明な抗腫瘍効果を有しており、今後の臨床応用に向けた検討が期待された。

会場の先生方からも貴重なご意見をいただき、実りあるワークショップであった。